

主権者及び消費者の育成に係る指導の充実に関する実践研究
令和 5 年度実施報告（概要）

団体名： 北海道教育大学附属札幌小学校

1. 類型

【類型 I ①】主権者に必要な資質・能力の育成に係る小学校又は中学校における実践
(ア. 社会科における指導)

2. 実践校について

実践校名	(ほっかいどうきょういくだいがくふぞくさっぽろしょうがっこう) 北海道教育大学附属札幌小学校	
	全校児童・生徒数	実践研究の対象
4 1 3 人	(学年)	(児童・生徒数)
	第 3 学年	7 0 人
	第 4 学年	7 0 人
	第 5 学年	6 8 人
	第 6 学年	6 7 人

3. 実践校における実践内容

(1) 概要

第 3 学年では「札幌市の発展」、第 4 学年では「地震災害」、第 5 学年では「農業」を取り上げ、学習指導要領の内容の取扱いにある「自分たちにできることなどを考えたり、選択・判断したりする」「多角的に考えて、発展について自分の考えをまとめる」場面の社会科学習を構想する。学校行事や特別活動等との関連性も明らかにしていく。

(2) 1 年目(令和5年度)の実践内容

令和 5 年度は、10 月に 4 年「自然災害からくらしを守る」の授業実践、2 月に 3 年「市の様子と人々のくらしのうつりかわり」の授業実践を行った。

4 年「自然災害からくらしを守る」の実践については、10 月に教科調査官にご来校いただき、授業を通してご指導いただいた。公助、共助、自助の視点から自然災害に備えた取組を学んでいく中で、子供自身が、自分たちにできることを考えたり、選択・判断したりすることができるような学習を行った。

3 年「市の様子と人々のくらしのうつり変わり」では、10 月の教科調査官からのご指導を基にしながら、単元デザインを工夫した。単元の学習問題づくりにおいては、札

幌市の過去、現在、未来の社会的事象（資料）を提示することを通して、子供の問いを引き出した。一人一人の問いを大切にするとともに、単元を見通す予想や学習計画を丁寧に行い、子供が主体的に問題解決的な学習を進められるように授業づくりを進めた。

単元の後半では、学習指導要領解説にも示されているように「市役所などが作成している資料などを基に、これからの市の発展に関心を持ち、市が将来どのようなようになってほしいか、そのためには市民としてどのように行動していけばよいかなど、市の将来について考えたり討論したりすることができるよう指導する」授業場面において、単元の学習を基にしながら、よりよい札幌市のまちについて子供たちが考えた。

4. 実践校における実施体制

校内の実施体制については、実施計画に基づいて授業づくりを行ったのち授業実践を行い、成果と課題を検証していった。授業実践については、北海道教育大学附属札幌小学校社会科部教諭2名を中心に、小学校3～6年の4つの学年において授業実践を行った。

社会科部教諭2名及び実践者による授業づくりでは、指導計画で示した「手立て1 子供が社会とつながる教材化と単元デザイン」「手立て2 社会認識を深めるための一単位時間」「手立て3 社会参画の力につながる一単位時間」を基に授業づくりを行い、「手立て4 子供の具体の姿の見取りと検証」を行った。

5. 各研究テーマについて、1年目の実践を踏まえた成果等

【類型Ⅰ①】主権者に必要な資質・能力の育成に係る小学校又は中学校における実践（ア. 社会科における指導）

＜児童生徒が社会的事象に興味・関心を持ち、自分事として捉えながら、児童生徒に考えさせる教育活動を行うため、どのような指導上の工夫が考えられるか。＞

既習とのズレや子供の素朴概念とのズレなどが起こる社会的事象の提示により、「どうして?」「なぜ?」と感じられるような教師の手立ての工夫が必要である。

3年生の授業実践では、未来の札幌市の人口が減っていくことによる驚きから札幌のまちの未来を構想していく姿を目指すことができた。4年生の授業実践では、自分たちが考えた防災や減災への取組と、市役所や地域防災マスターの人物の考える取組との違いを比較することを通して、自分たちにできることを考えようとする意識を高めていくことができた。

＜発達の段階に応じた情報活用能力の育成（特に、社会的事象に関する情報を収集し、その情報を公正に判断し、自分の意見をもつこと）に関して、どのような指導上の工夫が考えられるか。＞

本研究においては、学習指導要領の内容の取扱いにある「自分たちにできることなどを考えたり、選択・判断したりする」「多角的に考えて、発展について自分の考えをまとめる」場面の社会科学習を構想することとしている。そのことから、単元の中における調べる活動の中で、子供たちがどの情報を基に、どのように理解の質を高めていく

かによって単元の後半の「選択・判断する」「発展について考える」活動が大きく変わってくるのが分かった。指導にあたっては、単元の学習問題づくりにおける社会的事象の提示の工夫はもとより、単元の一時間ごとの学びにおいても、適切な資料の吟味や提示の工夫が必要であることが見えてきた。また、一時間ごとの「問い」の設定によっても、子供が教科書や資料集、一人一台端末等を活用して収集する資料が異なるため、「問い」の吟味も必要であることが分かってきた。

＜教科等横断的な学習を充実するために、教育課程の編成に当たってどのような工夫が考えられるか。＞

令和5年度に行った授業実践では、教科等横断的な学習を充実するため、教育課程を見つめ直し、以下のように工夫をした。

【3年「市の様子と人々のくらしのうつり変わり」】

本単元と総合的な学習の時間「わが街札幌」の関連を図った。社会科の学習において学んだことを基にしながら、一人一人がもった「問い」を総合的な学習の時間の中で探究していけるような学習展開とした。

これらの工夫を通して、教科等横断的な学習を充実するために、内容の関連を整理することの重要性を再認識することができた。それに加えて、子供一人一人の興味・関心等を生かし子供自身が主体的に学習テーマや探究方法等を設定することができるようにすることで、教科等で身に付けた資質・能力が総合的な学習の時間の探究にもつながっていることが成果として見えた。

【4年「自然災害からくらしを守る」】

本単元の学習内容と実生活とのつながりが見えるように意図的な単元デザインを行った。また、避難訓練や、命と安全を守る授業といった行事や特別活動との関連を図るよう工夫した。

主権者及び消費者の育成に係る指導の充実に関する実践研究
令和 5 年度実施報告（実践校における実践内容の詳細）

団体名：北海道教育大学附属札幌小学校

1. 類型

【類型 I ①】主権者に必要な資質・能力の育成に係る小学校又は中学校における実践
（ア. 社会科における指導）

2. 実践校名

北海道教育大学附属札幌小学校

3. 実践校における 1 年目（令和 5 年度）の実践内容

【3 年「市の様子と人々のくらしのうつり変わり」】

学習指導要領の位置付け

第 3 学年の内容(4)に該当する。

また、内容の取扱いウにおいては、

「イのアの「人口」を取り上げる際には、少子高齢化、国際化などに触れ、これからの市の発展について考えることができるよう配慮すること。」とされている。

単元の実際

《単元の学習問題づくりと学習計画》



1872 年、1912 年、1973 年、そして現在の札幌市中心部の写真を年代順に資料提示し、気付いたことを見つけていく中で、「札幌のまちがすごく変わっていている。」「人が増えているし、交通も便利になっている。」「人が増えたから建物も増えている。」「まちが進化している。」などといった子供の声を引き出した。そして、未来の札幌市がどうなっていくかも予想することで、「もっといいまちに変わっていくと思う。」という子供の思いを引き出した。そこから、「札幌市はどのように移り変わって、未来はどのようになっていくのだろう？」という単元の学習問題をつくっていった。

単元の学習問題をつくったのち、子供たちがまちの移り変わりを予想しながら、見通しを

もって調べられるように丁寧に学習計画を立てた。

《調べる活動》

予想や学習計画をもとに、教科書、副読本、札幌市役所が作成した資料などを基に、調べる活動が進んでいった。

札幌市役所のまちづくり政策局で作成している副読本を活用しながら年表にまとめる活動を通して、時間の経過に着目しながら、札幌のまちが人口の増加とともに、交通や公共施設、土地利用の様子が変化してきたことを捉えることができた。調べる活動の中で、札幌市のまちづくりに携わる人にも聞き取りを行いたいという子供の思いが出たタイミングで札幌市役所の人と出会う場をつくり、まちづくりについて学ぶ活動も取り入れた。



《札幌市の発展について考える授業の実際》

単元を通して、子供たちは札幌のまちが「楽しい」「にぎやか」「よいまちへ変化してきた」と移り変わりを捉えていった。

内容の取扱いにある、札幌市の発展について考える一時間の授業では、「これから先の札幌市も、もっと楽しくてにぎやかないい感じのまちになる」という子供の言葉を「市の発展」と捉えて授業を進めた。

「新幹線がやってくると、もっといろいろなまちとつながって楽しくなる。」

「札幌市の周りは再開発をしているから、これからますますにぎやかになる。」

「観光客の人たちが楽しめるイベントも続けていくまちにしたい。」

「人口は減っていく予想だけど、自分たちが大人になっても、公共交通があってほしい。」

「市役所の人たちから聞いたことを基にすると、札幌市は計画的にまちづくりをしているからもっといいまちになっていくと思う。」

などといった子供の発言が出された。

単元で学んだことを基にしながら、札幌市の発展について考えていたものと捉えている。



【4年「自然災害からくらしを守る」】

学習指導要領の位置付け

第4学年の内容(3)に該当する。

また、内容の取扱いウにおいては、

「イのアについては、地域で起こり得る災害を想定し、日頃から必要な備えをするなど、自分たちにできることなどを考えたり選択・判断したりできるよう配慮すること。」とされている。

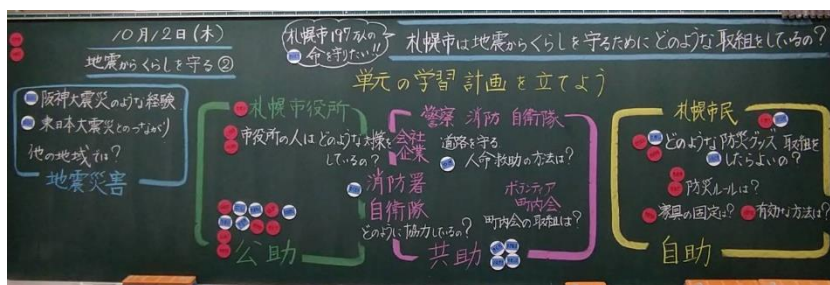
単元の実際

《単元の学習問題づくりと学習計画》

北海道及び札幌市で起こった地震災害の歴史を提示することで、札幌市は地震災害が少ないのではないかと考えていた子供たちも、「何年かおきに、地震が起きている。」「冬に起こる地震も多い。」「断層などの地



地震災害は怖いけれど、自分たちのくらしを守るためには、いろいろな人が取組をしてくるんだという意識を醸成し、「北海道や札幌市は地震からくらしを守るためにどのような取組をしているのだろうか？」という単元の学習問題をつくった。



札幌市 地震災害年表									
年号	明治時代	大正時代	昭和時代			平成時代			令和時代
西暦	1868 1869 1870 1871 1872 1873 1874 1875 1876 1877 1878 1879 1880 1881 1882 1883 1884 1885 1886 1887 1888 1889	1890 1891 1892 1893 1894 1895 1896 1897 1898 1899 1900 1901 1902 1903 1904 1905 1906 1907 1908 1909 1910 1911	1912 1913 1914 1915 1916 1917 1918 1919 1920 1921 1922 1923 1924 1925 1926 1927 1928 1929 1930 1931 1932 1933	1934 1935 1936 1937 1938 1939 1940 1941 1942 1943 1944 1945 1946 1947 1948 1949 1950 1951 1952 1953 1954 1955	1956 1957 1958 1959 1960 1961 1962 1963 1964 1965 1966 1967 1968 1969 1970 1971 1972 1973 1974 1975 1976 1977	1978 1979 1980 1981 1982 1983 1984 1985 1986 1987 1988 1989 1990 1991 1992 1993 1994 1995 1996 1997 1998 1999 2000	2001 2002 2003 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018 2019 2020 2021 2022	2023 2024 2025 2026 2027 2028 2029 2030 2031 2032 2033 2034 2035 2036 2037 2038 2039 2040 2041 2042 2043 2044	
札幌で起きた大地震	明治10年(1877) 大規模な地震が発生したと伝わるが、詳細不明。	明治20年(1887) 大規模な地震が発生したと伝わるが、詳細不明。	明治30年(1897) 大規模な地震が発生したと伝わるが、詳細不明。	明治40年(1907) 大規模な地震が発生したと伝わるが、詳細不明。	明治50年(1917) 大規模な地震が発生したと伝わるが、詳細不明。	明治60年(1927) 大規模な地震が発生したと伝わるが、詳細不明。	明治70年(1937) 大規模な地震が発生したと伝わるが、詳細不明。	明治80年(1947) 大規模な地震が発生したと伝わるが、詳細不明。	明治90年(1957) 大規模な地震が発生したと伝わるが、詳細不明。

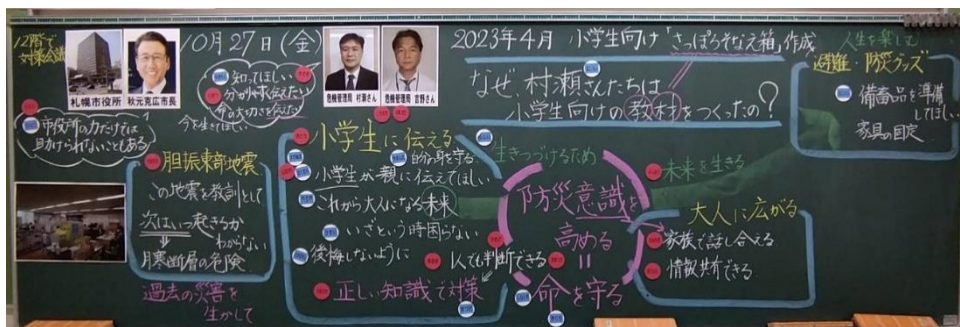
《調べる活動》

単元の学習計画を立てた段階で、一人一人の調べたいことが見えていたため、一人一台端末や教科書、副読本、札幌市防災マップ等を活用しながら調べる活動を進めていった。

その際、単元の学習問題や学習計画を教室に掲示するという環境づくりによって、単元の追究の見通しをもてるようにした。

調べる活動の後半では、札幌市役所の危機管理局の方の取組の意味を考える活動や、北海道地域防災マスターの方から直接聞き取りを行う活動を取り入れることによって、暮らしを守るための取組について理解を深めていくことができた。





《自分たちにできることを考えたり、選択・判断したりする授業の実際》

単元の終わりでは、内容の取扱いに示されている「地域で起こりうる災害を想定し、日頃から必要な備えをするなど、自分たちにできることを考えたり選択・判断したり」する一時間の授業を行った。

子供たちが考えた自分たちにできることを黒板に貼っていくと、自助の取組が多いことが見えてきた。一方、単元の中で学んできた札幌市役所危機管理局の方や北海道地域防災マスターの方は、「自助よりも共助のほうが難しい。」「共助への意識が足りない。」と言っている事実を提示した。それに加えて、事前のアンケート結果から、自助の取組は学級の半数以上が取り組んでいるにも関わらず、共助の取組はほとんどの子供が取り組んでいないという事実にも目を向けられるようにした。そのことによって、「自分たちにできることは何だろう?」「地震災害からくらしを守るために必要なことは何だろう?」という問いが子供の中に生まれていったと捉えている。

初めは、「家具を固定する。」「防災バッグを準備する。」「非常食や水を用意する。」といった考えをもっていた子供が多かったが、この問いが生まれた段階で再度自分たちにできることを考えたり選択・判断したりしていく中で、

「自分の家は、液状化現象が起こる可能性が高い場所だから、遠くに避難できないときのために、非常食を準備しておくことが必要だ。」

「マンションで行われる避難訓練に参加することで、災害が起きた時には、近所の人と助け合える関係がつかれると思う。」

「たくさん備蓄しておけば、災害時に困っている人がいたら、分けてあげたり、助け合ったりできると思う。」

「家族でしっかりと話し合っておくことで、家族の命を守れるし、避難する時には、お年寄りや体の不自由な人にも声をかけて非難することが大切だ。」などと、自分だけの取組にとどまらず、責任ある地域の一員として自分たちにできることを考えようとする姿が見られた。

